

研究主題 「自他共に認め高め合い、自己肯定感を育む道德教育の探究」

① 主題設定の理由

平成 27・28 年度の 2 年間、文部科学省「道德教育の抜本的改善・充実に係る支援事業」の委託を受け、小中と家庭・地域で連携し、地域の実態や課題に応じた特色ある道德教育の実践的研究を行った。平成 28 年 12 月 2 日には研究発表を行い、道德の授業における T T のあり方や家庭・地域と連携した教材の活用を提案することができた。

平成 29・30 年度は、この 2 年間の研究をもとに、1 時間の授業づくりを中心に道德教育の探究を行い、3 回の公開授業を通して提案授業を行うことができた。特に、平成 30 年度は、道德科の評価方法についての研究も深めた。1 時間の授業についての評価を積み重ね、生徒たちの心の成長を見取することはもちろん、授業者の授業改善にも生かしていくような方策を練ることができた。

この 4 年間の成果として、「道德の授業を楽しみあるいはためになると思っているか」という質問に対して、思っている割合は全国の割合と比較すると、30 ポイント以上高かったことである。その回答理由として「他の人の意見を聞いて新しい考えが生まれるから」「自分とは違う意見を知ることができるから」「改めて自分の考えを振り返ることができるから」「自分を見つめなおすことができるから」などが多くあった。これは、学び合う活動などを取り入れた授業の工夫をしたことで、生徒自身が考えを深めたり広げたりすることができたことや、自分の中になかった新しい道德的価値観が育まれていったことが要因と考えられる。また、学習する道德的価値を明確にし、学習テーマについてじっくりと自分の考えを深める時間を設けたことも、道德の授業に意義を見出している理由と考えられる。更には、毎週の道德の時間を確実に確保し、効果的な指導方法を教師間で共有し、工夫していくことで、生徒たちの道德の授業に対する関心は高まり、道德性を育むことにつながったと考える。

また、生徒の自己肯定感を測る「自分には良いところがあると思っている」という設問に対して、各学年とも肯定的な回答が増加している。これまでの研究の柱としている「学び合う活動」を通して、生徒同士の意見を交流しあう中で互いの良さを認めあえる機会となっていたり、学校行事等の体験活動と道德の授業との関連を意識して授業づくりに取り組んだりした成果だと考える。つまり、道德教育の改善・充実に取り組んだ結果、生徒の自己肯定感が高まったものと考えられる。更には、学級や学年の掲示物にも日頃の生徒たちの頑張りだけでなく、学校行事等を通して生徒同士が頑張り認め合うような掲示物の工夫をしている。このような環境づくりも、自己肯定感が高まった要因と考える。

しかしながら、自分には良いところがあると思っていない生徒は 2 割程度おり、成長に伴い、他者との比較において自分を捉え、劣等感を感じたり、他者と異なることへの不安から自分の個性の良さを認めたり伸ばしたりすることに消極的になったりする姿勢も見られる。自分の短所も個性の一つであることを踏まえつつ、自分を受け入れ、新たな自分の発見へとつながる道德教育の充実が必要になると考える。

また、本校の生徒は学力が伸び悩み、学習意欲が高まらない生徒も見受けられる。自分にはできることがある、自分は成長している、自分には友達と異なる面もある、自分には良いところがあるという思いから、自分自身を唯一無二の存在であると認める*自己肯定感を高め、自分は集団の中で役に立っているとか人のためにしていることがあるという*自己有用感を高めることが、学力の向上にもつながると考えられる。

そのため、学びの基盤としての道徳教育を通して、自分だけでなく他者も認め合い、自己肯定感を高めるような生徒を育成したいと考え、本主題を設定した。

*自己肯定感＝自分には良いところがある、自分は～ができるなど、自分を肯定する自己評価

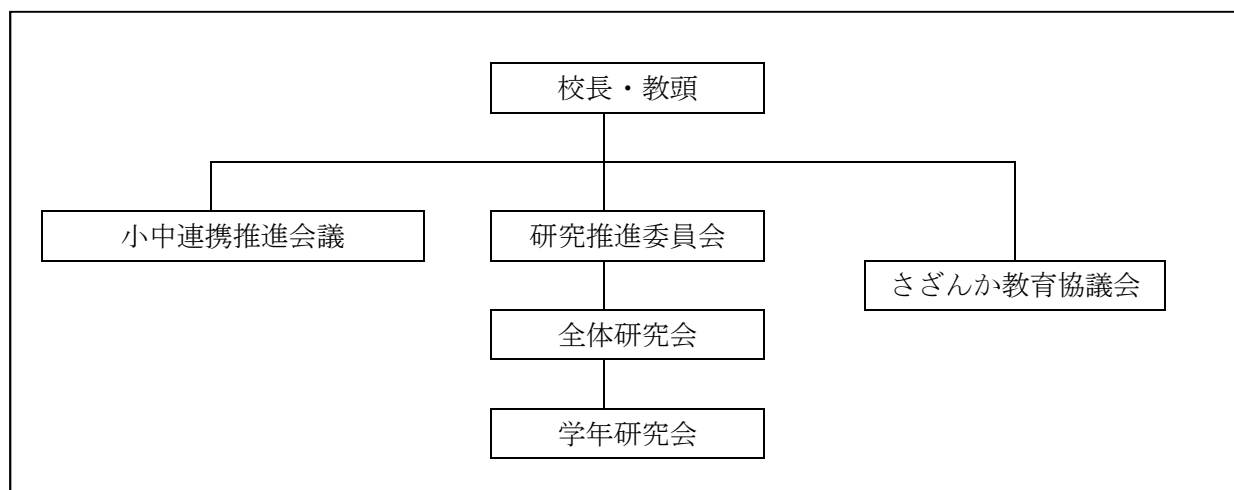
*自己有用感＝自分は人の役に立っている、他者に貢献している、人から感謝されているなど、他者との関係をふまえた自己評価

② 研究の重点

- ・「道徳科」の評価
- ・ねらいとする道徳的価値に迫る発問（テーマ発問）の工夫
- ・TT、ローテーション道徳を生かし、生徒の思考を整理する構造的な板書の工夫
- ・生徒同士が自分の思いを表現し、多様な価値観に触れることができる学び合う活動の工夫

③ 研究組織

(ア) 研究組織



(イ) 組織の役割

- ・ 研究推進委員会
校長・教頭・教務・学年推進委員で組織し、主題に迫るために研究の方向性、研究の進め方について協議するとともに、研究の全体計画を立案する。
- ・ 全体研究会
全職員で行う意思統一の場とする。各部会での研究内容を報告し、全体会で協議を重ねて、各部会の取り組みが全職員のものとなるようにする。
- ・ 学年研究会
全体研究会を受けて、自己肯定感・自己有用感を高める学年・学級経営の在り方を探る。
また、TT・ローテーション道徳の計画・実践をし、授業を通して研究の重点について研究を深める。
- ・ 小中連携推進会議
小中学校校長、教頭、教務で組織し、研究の推進や小中連携活動等の提案などを行う。
- ・ さざんか教育協議会
地域代表、小中学校PTA会長、町教育委員会、小中学校管理職・教務主任で組織し、児童生徒が生きる力を育み、豊かな人間性や社会性を養い、その力を発揮する教育活動の推進のために、連携の在り方などの提言や協議を学期に1回行う。

④ 年間計画

月	計画	内容
4	・第1回全体会	・研究の概要、テーマ、方向性、組織について
5	・第1回QUアンケート ・第2回全体会	・今後の計画、授業研究会について
6	・第1回授業研究会【代表授業】 ・第3回全体会 ・地域・親子ふれあい道德 ・第1回小中合同研究会	・公開授業 ・授業研を終えて、今後の取組について ・小中連携を通じた、学習規律について
7	・第4回全体会	・1学期の振り返りと2学期に向けての計画
8	・第5回全体会	・1学期に行った授業の評価
9	・第6回全体会 ・地域ふれあい道德	・授業づくりの見直し
10	・第7回全体会 ・QU検査〔2回目〕	・授業研を終えて、今後の取組について
11	・第8回全体会	・評価方法についての見直し
12	・第9回全体会	・今年度の分析
1	・第10回全体会	・評価の記入方法について
2	・第2回授業研究会【各学年】 ・第11回全体会	・公開授業 ・本年度研究の総括と次年度研究について
3	・第12回全体会	・次年度の研究の方向性について